1 月 15 日のメッセージ

聖書：ルカによる福音書　5：　1－11

「恐れることはない」

私たちの先頭に立って歩まれるイエスは、一人で歩まれるわけではありません。もちろん、神の子であるから、イエスはお一人でもその用のなされることでしょう。直接、弱くされた者たちに近づかれ、寄り添われます。

しかし、一人で向き合うことには限界があります。

モーセは民の訴えを聞き、一人で裁いていました(「翌日になって、モーセは座に着いて民を裁いたが、民は朝から晩までモーセの裁きを待って並んでいた。」出エジプト記 18:13)。モーセしか神に問うことができなかったから、ある意味仕方の無いことかもしれません。モーセのしゅうとエトロは、モーセのやり方が良くないといさめます(「モーセのしゅうとは言った。『あなたのやり方は良くない。あなた自身も、あなたを訪ねて来る民も、きっと疲れ果ててしまうだろう。このやり方ではあなたの荷が重すぎて、一人では負いきれないからだ。』」出エジプト記 18:17-18)。より広く、より大きな助けのために、人と共にその任に当たる方がより良い、と。

イエスももちろん、この限界を知っておられます。だから、より広く、より大きな救いのために、イエスは助け手を必要とされるのです。

イエスが目をとめられたのは漁師たちでした(「わたしはこの地の信頼のおける人々に目を留め／わたしと共に座に着かせ／完全な道を歩く人を、わたしに仕えさせます。」詩編 101:6)。

しかし、目をとめられた側はどのように受け止めたのでしょう。自分に自信があるわけではありません。神のことは知っていますが、どこまで信じているかと問われれば、到底、他人に誇れるようなものでもありません。まして、「完全な道を歩く人」などではないからです。事実、イエスが目の前におられ、群衆に話しておられた直後にもかかわらず、イエスの言葉を信じられないのです(「先生、わたしたちは、夜通し苦労しましたが、何もとれませんでした。しかし、お言葉ですから、……」ルカによる福音書 5:5)。

ところが、渋々ながら網を降ろしたペトロたちに衝撃が走ります。自分たちの経験からはあり得ない結果がもたらされたからです(「そして、漁師たちがそのとおりにすると、おびただしい魚がかかり、網が破れそうになった。」ルカによる福音書 5:6)。

そして、神はペトロの心を開かれます。それまで信じていなかった人の心を、神は開かれるのです(「ティアティラ市出身の紫布を商う人で、神をあがめるリディアという婦人も話を聞いていたが、主が彼女の心を開かれたので、彼女はパウロの話を注意深く聞いた。」使徒言行録 16:14)。

心開かれたペトロは、自らの至らなさを受け止め、イエスから離れようとします(「これを見たシモン・ペトロは、イエスの足もとにひれ伏して、『主よ、わたしから離れてください。わたしは罪深い者なのです』と言った。」ルカによる福音書 5:8)。自分など何の役にも立たないだろう、と。魚すら捕ることのできない自分は、イエスの前に立つ資格はない、と。

しかし、イエスが求めておられるのは、まさにそのような人間です。自分の現実を知り、神の前に自分の弱さを認められる人間なのです。だから、「恐れることはない」(ルカによる福音書 5:10)と声をかけられます。「あなたこそが必要だ」「あなたを呼びに来たのだ」と。

私たちもペトロと同じでしょう。何の自信もありません。他人に誇るようなものは何もありません。にもかかわらず、今、私たちも呼ばれているのです。恐れしかありません。不安しかありません。

それでも、私たちの耳にも聞こえるはずです。「恐れることはない」とのイエスの言葉が聞こえてきます。「今こそ、私はあなたを必要としている」と。その声にどう応えましょう。